**読書ノート**

2016.12.27/小林

1. **いじめ問題について**

企業でのパワハラ、セクハラ問題の参考になるのではないかと思い、以下の二冊読みました。

**(1)森田洋司「いじめとは何か　教室の問題、社会の問題」（中公新書、2010年7月）**

* 大阪樟蔭女子大学長、大阪市大名誉教授、専門：教育社会学、犯罪社会学、社会病理学、生徒指導論
* まず、問題へのアプローチのし方が参考になった： ①データにもとづいている、②視野が広い、③対策が根源的･多面的。この三点は下記の尾木直樹にも当てはまる。
* 以下は、第4章、5章、6章（P.116-197）の要旨。
* データによれば、子どもの規範意識は高い。やってはいけない事をきちんと認識している。ではなぜいじめが発生するのか？
* 一つは、いじめは「乗り物」に乗っておこなわれる。ふざける、からかう、冗談という「乗り物」に乗っていじめがおこなわれる。最初はちょっとふざけていただけだったのが、いつしかいじめになる。そうすると、加害生徒はいじめていると認識できない。教師も分からない。善いおこないが「乗り物」になることもある。集団のあるメンバーが怠けているのを繰り返し注意すると、それがいつしかいじめになる。
* 二つ目は、「いじめ」の定義はあるが（文部科学省\*）、いじめか否かの境界線はあいまい。そうすると、加害者はいじめと知らずにやってしまう。教師もいじめと認識できない。（\*批判あり）
* 三つ目は、いじめは友人や仲間のあいだで起きるのが普通。まったく接触のない生徒からいじめられることは少ない。友人どうしでふざけ合っているとしか見えない。これがいじめを見えにくくしている。
* 四つ目は、いじめられている生徒はいじめに対して拒否・抵抗・不快の反応を見せない。「へらへらと笑っているだけ」等の無関心･気にしない･平気を装う。拒否･抵抗･不快の反応を見せるといじめがエスカレートすることを知っているから。これだと周囲の者は気づかない。
* 五つ目は、社会・学校の秩序と教師の威信のゆらぎ。規範からの逸脱に対し社会･学校･教師がルーズだと子どもの規範意識に悪影響を与える。児童虐待、ﾊﾟﾜﾊﾗ、ｾｸﾊﾗ等に対して鈍感な社会は子どもの規範意識をﾙｰｽﾞにする。
* いじめの四層構造：①加害生徒、②被害生徒、③観衆－面白がって見ている生徒、④傍観者－見て見ぬふりをしている生徒。この四層構造の中でいじめはおこなわれている。
* 観衆はいじめを積極的に是認していることになる。いじめの「火に油をそそぐ」存在。したがって、加害者側に立っている。
* 傍観者は、見て見ぬふりをすることにより結局いじめを支持していることになる。傍観者の存在は、いじめという力の乱用に対する服従の構造を広げ、それが集団圧力になって「止めに入る子」をためらわせることになる。傍観者も加害者である。
* いじめの進行にしたがって学級はこの四層構造に収斂していく。この四層構造の中で、いじめの被害生徒は孤立する。

④傍観者

①

②

③観衆

* いじめにどう対応するか：社会問題ととらえ、多面的な取り組みで社会の自浄能力を高める。家庭も学級も学校も「社会」である。
* そのⅠ：市民性教育（市民性＝シチズンシップ）
* 欧米で取り入れられて成果をあげつつある。日本の教育再生会議(内閣所管)も着目している。
* 日本のこれまでの対応は「いじめはダメ」という道徳観に訴える教育。これだけでは不十分。
* いじめを道徳の問題とのみとらえるのではなく、それも含め社会全体の問題ととらえ、生徒の社会性･社会的リテラシーの育成が必要。これにより、社会の自浄能力を引きだす。
* 市民性教育を一言でいうと、基本的人権の主体としての自覚と行動のしかたを教え、社会の安寧･福祉を向上させる公共善を図り、公的な活動に自主的にかかわっていく主体を確立すること。
* 日本では、社会科や公民科等でカバーしているが座学・知識教育に傾斜しており、道徳教育はおこなわれているものの機能していない（下記⒊を参照）。
* 日本においても生徒会等での生徒の自主的な活動としていじめの自浄能力を引きだそうとする動きがある。たとえば（以下はｲﾝﾀｰﾈｯﾄより）、生徒会による「いじめ撲滅キャンペーン」、「いじめ根絶集会」、生徒による校内巡回、いじめ根絶ポスターの掲示、毎月のいじめ調査など。
* そのⅡ：ソーシャル・ボンド理論にもとづく対応策
* 生徒が学校に対して持っている意味（社会的きずな）が多いほど、その生徒は問題行動をおこしにくい、ということを米国の犯罪社会学者T.ハーシーが実証的に明らかにした。たとえば、学校の歴史伝統を誇りに思っている、部活動が好き、学校には友達がいる、給食のおばさんが親切にしてくれる、理科の授業は面白い、など。これらがｿｰｼｬﾙ･ﾎﾞﾝﾄﾞである。逆に、ただなんとなく学校に来て興味のない授業を受けているだけだと学校に対するｿｰｼｬﾙ･ﾎﾞﾝﾄﾞが非常に弱く、規範から逸脱していく傾向にある。
* つまり、学校生活がもつ意味が学校への引力となり、その生徒は通常の学校生活から逸脱しにくい。
* ｿｰｼｬﾙ･ﾎﾞﾝﾄﾞを創り出す教育が大切。(1)愛着：学校の歴史伝統、出身著名人、競技成績等を知らせる、(2)コミットメント：学校における役割を与えるなど、学習指導要領では社会的役割をになうことの重要性が教えられている、(3)巻き込み･インボルブメント：学習意欲を引き出す授業、体験活動をつうじて達成感をもたせる、ほめることで自己肯定感をもたせる、(4)規範の正統性への信念を育てる：社会･学校はいじめに厳しく対応すること。いい加減な対応は信念を損なわせる。「ダメなものはダメ」
* まずは家庭が大切：家庭内で子どもに役割を与えるべき、家族も社会集団であり、そこでしなければいけない仕事があることを教えるべき、集団のメンバーとしての義務と責任を教えやるべき仕事は自分で探して見つけるものであることを教えるべき。これにより、集団を運営していくには各自やるべき仕事があることを知り、社会性が身についていく。

**(2)尾木直樹「子どもの危機をどう見るか」（岩波新書、2000年8月）**

* 早大教育卒、海城高校･公立中学校等の教師、東大/早大等講師、法政大教授
* 以下は、P.36-60の要旨。
* いじめの原因は何なのか
* 主因は生徒のストレス。ストレスといじめに相関関係があり、子どもの道徳心･規範意識の問題ではない。
* 調査によれば、いじめは面白いからやってしまい、なぜ面白いのかは、①優越感を感じる、②ストレス解消、③ゲーム感覚だから。→ 道徳教育で解決できることではない。
* 深谷教授(学芸大)によれば原因は、①絶えず評価されランク付けされる精神的疲労、②自分が尊重されていない不満、③遊びの機会減少、④人間関係のルールがあいまいになっている、⑤共感性の低下、⑥幼少期のけんか･いじわる体験不足、⑦子ども集団の変質：健全性と非行抑止力の低下。→ ①と②はストレス、③～⑦は遊びの機会減少から派生したこと。
* 対応策の考え方
* 文科省はいじめを「弱い者いじめ」ととらえ(定義)、「人間として絶対許されない」と精神主義的圧力を加える「心の教育」で問題を解決しようとしているが、これでは解決できない。このような圧力的な道徳教育はそれ自体が生徒のストレスになる。
* なお、いじめの定義は森田洋司の定義「集団内の相互作用過程において優位に立つ者による精神的･身体的苦痛」(要約)が適切、したがい「弱い者」も優位に立つ場合がある。
* 加害生徒の救済に重点を移すべき(文科省は逆)、元を断つ、加害生徒は非行化する傾向があり非行防止にもなる。非行の芽を摘む。
* 傍観者にならない人間関係を作るための「学級づくり」が必要。自分の友だちがいじめられていて、かつ加害生徒も友だちであれば仲裁/救済行動を起こす可能性は高い。
* 学校改革、その他の対応策は省略。

1. **道徳教育について**

**(1)CiNii論文データベースから**（いずれもPDF公開）

①「道徳教育の現状と道徳の教科化、「特別の教科　道徳」の今後のあり方－学習指導要領の改訂を通して－」(著者略)

②「特別の教科 道徳の意義と役割－幼小連携強化における道徳授業への新提言」(〃)

③「特別の教科 道徳と特別活動との連携を密にした教育課程の編成─道徳判断を重視した学級づくりの構想と実践」(〃)

* 道徳教育の歴史：①戦前は忠孝愛国などを教える修身が必須科目(勤労、博愛、誠実等もあった)。②終戦直後1945年にGHQの指令により修身は廃止、社会科が新設、社会科は社会への適用、良好な人間関係構築等々を目的とし、道徳教育の中心とされた。③1950年米国の提言により道徳教育は社会科を含め学校教育の全過程でおこなうべきとされた。④1952年占領終了とともに道徳教育の強化が始まり、1958年小中学校で道徳を週一時間必須とした(正規の科目ではない)。⑤いじめの問題化･非行の低年齢化等々をうけて2014年の中教審答申･2015年の学習指導要領改正により小学校は2018年から、中学校は2019年から検定教科書による正規科目に格上げとなった。新指導要領には道徳によるいじめ問題への対応が明記された。
* 道徳という教科のむずかしさ
* 道徳とは何かが不明確、たとえば、捕鯨･イルカ漁は非道徳的か？ ギャンブルは非道徳的か？ カジノ統合リート法案は？ 戦争で人を殺してよいのか？→質問されたら教師は答えられるか
* 道徳は教科書･座学で教えられるのかという疑問、行動が伴わない道徳知識だけ教えて何になるのか、だからといって、体験的な授業は簡単にやれるものではない
* いじめ問題は学校の道徳の授業だけで対応できない、家庭･TV･ネット･ゲーム･漫画等々すなわち社会全体が子どもの心に多大な影響を与えている
* 指導要領は生徒に考えさせる道徳、生徒と議論する道徳を目指しているが、教師の指導力がないと議論が発散して生徒は何を学んだか分からずに授業が終わってしまう、等々

**(2)「やさしく学ぶ道徳教育 理論と方法」（ミネルヴァ書房、2016年6月）、大阪教大/同志社女子大等の先生の論文集**

* 内容が多岐にわたり道徳教育の奥深さを知った。目次の一部：道徳教育と禅の思想/道徳教育における哲学的基礎/道徳教育と身体/道徳教育と対話理論、他
* 「道徳教育と身体」の要旨(小室弘毅: 関西大准教授、明大政経卒、東大院修士)
* 日本文化は人格を肚(ﾊﾗ)で象徴的にとらえてきた、「肚のすわった人」など。
* 「凝念法」という肚の鍛錬法がある、成蹊学園創立者が創始した瞑想/呼吸法、成蹊小学校で現在でも実施されている(東大教育学研究室紀要31号掲載の小室弘毅論文(PDFあり)を参照)
* 教師には何をどう教えるよりまず人格が大切、人格を基礎としてその上に道徳あり、教師の人格は生徒に影響を及ぼす、そのためには身体どうしの同調･共鳴が必要、そのためには教師も生徒と一緒に凝念法により人格の錬成をしろ
* 教師の人格と身体が教室の雰囲気を形づくり生徒に影響を与える、生徒の姿勢の乱れを正すには教室の雰囲気を正せ、そのためには教師の人格と身体が正しくあらねばならない、道徳教育のためには教師の人格と身体が問題とされなければならない。
* 本書全体の読後感想：①学校生活のすべてが道徳教育になっている、たとえば授業を受けること自体、宿題をやってくること自体、そうじ･給食などの当番、廊下は走らない等の校内ルールを守る、など。②子どもの見るもの･聞くもの･経験するものすべてが子どもの道徳心を作り上げている（良くも悪くも）、親･大人の責任は重大。③その中で家庭生活が最も重要であろう。④道徳は生活のあらゆる面に関係するので道徳教育(科目としての)は「よい社会人」を作る中の一部と位置付けられるべきなのであろう。

以上